歴史地理学 156 15～25 1991.12.

労力交換「ユイ」からみた村落社会の空間構造

池 田 勝 幸

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．研究対象地について
(1) 対象地の概況
(2) 対象地の空間的まとまり
Ⅲ．ユイ関係の検討
(1) 同族集団との対応
(2) 旧村・班領域との対応
a．打沢（1～5班）
b．鍬不取・怒田（6・7班）
Ⅳ．むすびにかえて

Ⅰ．はじめに

これまでの村落地理学においては，村落社会の空間構造を捉える視点として，入会林野，水利組織，神社氏子集団，講集団，墓郷集団，共同労働組織，行政末端組織，同族集団等が取り上げられ，そこになんらかの空間的なまとまりを見いだそうとしてきた[1]。これらの視点に共通するのは，それらがいずれも，諸集団の空間的な広がりに注目している点である。こうした見方は，村落研究の方法論として伝統的に踏襲され，成果をあげてきた。しかしながら，その一方で，集団を構成する個々の家については必ずしも十分な注意が払われてこなかったように思われる[2]。例えば1戸の家に着目した場合，その家は他の家と地域集団の一員同士としての関係だけでなく，家対家の関係も結ぶはずである。そのような家対家の関係を全戸にわたって網羅し，全体として俯瞰した時，そこに何か空間的なまとまりはみられないだろうか。本研究は，このような関係の例として労力交換の「ユイ」（結）を取り上げ，ユイの関係を手がかりに村落社会の空間構造を見ようとするものである。

ユイは，主として農事における労働慣行であり，村落における相互扶助として機能してきた。具体的には，家族労働力だけでは困難な作業時の「労働力の交換」[3]と定義され，片務的な委託労働，あるいは「家を越えた集団」[4]で行われる道普請などの共同労働とは一線を画する。ここで注意しておきたいのは，例えば屋根の葺替え，共同田植などの共同労働を広義のユイに含める場合もしばしばみられることであるが[5]，本稿においては，あくまで家対家の労力の貸借関係のみを考察の対象とする[6]。

ユイについては，他分野での研究も含めて研究事例は少ない。本研究において関心のあるユイ結合の契機についてごく簡単に整理すると，ユイの契機としては血縁関係あるいは地縁関係があり[7]，とくに戦後においては地縁関係によるユイへと変化したという見解がみられる[8]。他に，水利関係，所有耕地の位置関係[9]，同一栽培作物間によるもの[10]もあり，地縁集団によるものの中には，信仰集団や年齢集団がユイのグループを形成していた例もみられた[11]。また，南西諸島におけるサトウキビ栽培において，親族関係を中心としたユイの組織が今日でも積極的にいかされている例も報告されている[12]。

本稿では，まず事例研究の対象とする山間の一集

落について，社会関係の空間的なまとまりに留意しつつ，その概況について述べる。次に，ユイ関係の契機として，同族関係との対応を検討しその後，地域集団にみられる空間領域とユイの関連を考察する。

Ⅱ．研究対象地について

(1) 対象地の概況

事例研究の対象とする長野県下伊那郡泰阜(やすおか)村三耕地地区は，同県の南部，天竜川左岸に位置し，下伊那地方の中心都市である飯田市に隣接する山間村落である（図１）。当地区は，旧打沢(うつさわ)村，鍬不取(くわとらず)村，怒田(ぬた)村の３藩政村が，明治８（1875）年の泰阜村成立によって個々の行政区となった後，同22年に泰阜村「第三区」として統合され，さらに同34年「三耕地」[13]と改称され今日に至っている。

集落は，樹枝状に展開する複数の「洞(ほら)」[14]と呼ばれる小空間に立地し，近世期には３カ村をなしていたとはいうものの，景観的には近接しており，集落形態としては疎塊村状を示す。当地区の人口，総戸数は，昭和35年には483人，83戸であったが，現在（平成２年）では286人，76戸となっている[15]。30年間で人口が59.2%にまで大きく減少しているのに対し，総戸数の減少率は小さい。

当地区は山間に位置しながら稲作を基礎にした農業が行われてきたところであり，林野での薪炭生産も含めて多様な生産活動が営まれてきた（図２）[16]。最近では，昭和40年代に入ってから全村的にコンニャク栽培がブームとなり，この時期に養蚕をやめ，コンニャクに切り替えた農家も多い。しかし，現在では当時のような積極的な生産は行われておらず，兼業の増加とともに小農化の傾向が進んでいる[17]。

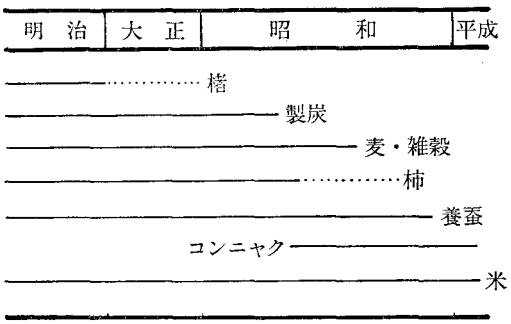

図２　主要農産物等の生産時期
出典）長野県(1973)：『長野県町村誌 南信篇―複刻版―』名著出版，365頁，他

(2) 対象地の空間的まとまり

次に三耕地地区の空間的なまとまりについて概観してみると，まずこの地区が，農業センサスの上で「農業集落」として扱われていることをあげておかなければならない。農業集落は共同体の基礎単位であるムラの領域にほぼ重なるものであり[18]，ムラ領域を把握する際の指標とされている[19]。このような通念に従えば，表面的には三耕地地区が一応ムラ

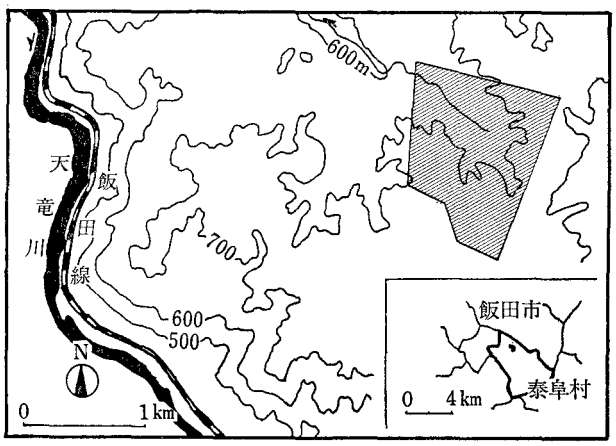

図１　研究対象地区の位置

と考えられよう。

村落社会の結合契機に目を向けると，現在当地区は，総面積262haに及ぶ共有山を有する。この共有山は，近世期には，打沢村等3カ村の他1村を含めた計4カ村が入会関係にあった[20]。共有山は，昭和52年に「三耕地生産森林組合」として法人有化され，地区財政の主要な財源となっている[21]。この他，当地区の講集団として，「秋葉様」（秋葉講），「戸隠神社」（戸隠講），「庚申様」（庚申講），「入登山神社」，単に「コウ」と呼ばれる経済講（頼母子講）が存在した。聞き取り調査によれば，これらは三耕地を単位に行われたという[22]。なお，村領域の指標としてよく取り上げられる水利組織は，当地区においては存在しない[23]。

こうした三耕地レベルでのまとまりがみられた一方で，旧村領域を単位とするまとまりも指摘される。三耕地地区には各旧村ごとに神社がある。これらはいずれも旧村社であり，現在でも個々の旧村単位で祭事が行われている[24]。また，旧村領域内にはそれぞれ堂が存在する。旧打沢村の堂は後述する同族集団H[25]の氏神を祭ったものであり，必ずしも旧村の堂とは言いきれない面もあるが，旧鍬不取村，旧怒田村のそれは旧村の所有であり，祭事後の酒宴の場などに利用されている。

また，旧打沢村，旧鍬不取村では若干の例外を除いて「福寿院」（図3の№5）の檀家になっているのに対し，旧怒田村では全戸が特定の檀那寺をもたず，葬儀を「神葬祭」と称する神式で行っている。福寿院での聞き取りによれば，明治時代初頭までは旧怒田村の全戸が福寿院の檀家になっていたが，当時福寿院が無住となっていたため，葬儀の際に不便が生じ，また，死者にまで階級をつける仏式に憤怒した人などがおり，順次神式に移行したという。さらに旧怒田村は，集落の南東1kmほど離れた場所に位置する「分外山」山頂の「秋葉神社」の氏子でもある。秋葉神社の氏子は旧怒田村以外に他3集落から構成されているが，そこには旧打沢村，旧鍬不取村は含まれていない。このような旧村領域ごとのまとまりや，旧怒田村と他の旧村との性格の違いが現在でも存続していることは，以下，ユイ関係を検討する上で十分注意しなければならないだろう。

旧村領域のさらに下部には班組織[26]が存在する。班領域は，道普請，葬式組，寄り合いの単位になっており，事例地区においては現在7班で構成され，1班当りの戸数は8～14戸である。ここで特筆すべきことは，1～5班が旧打沢村を分割しているのに対し，6班及び7班はそれぞれ旧鍬不取村，旧怒田村の領域を踏襲していることである[27]。このことは，上述の神社，堂の機能とともに，旧村のまとまりが強く残存していることを示唆するものとして捉えられる。また班組織は，道普請，葬式組及び寄り合いの単位になっており，班によっては農作業の協業化や杉苗木の生産などを独自に行うものもみられた。

こうした地区，旧村，班といった空間的かつ社会的なまとまりに加えて，当地区は複数の同族集団によって構成され，同族によっては班内部でまとまっているものもみられる。これについては，次章で詳述する。

以上，空間的なまとまりに留意しつつ三耕地地区の概況を紹介した。次に，ユイ関係がこうした空間的な枠組みといかに関連しているかを検討する。その際，耕耘機をはじめとする農用機械の普及などにより，ユイ関係の解体が昭和30年代から始まったことから，昭和30年代のユイ解体開始以前の関係を中心に考察を進める[28]。なお，便宜上，昭和30年代の調査結果については旧打沢村（図3）と旧鍬不取村及び旧怒田村（図4）の2つの図に分け，現在の状況は図5にまとめて示した。また，これまで用いてきた旧村の名称を，今後単に「打沢」，「鍬不取」，「怒田」として表現する。

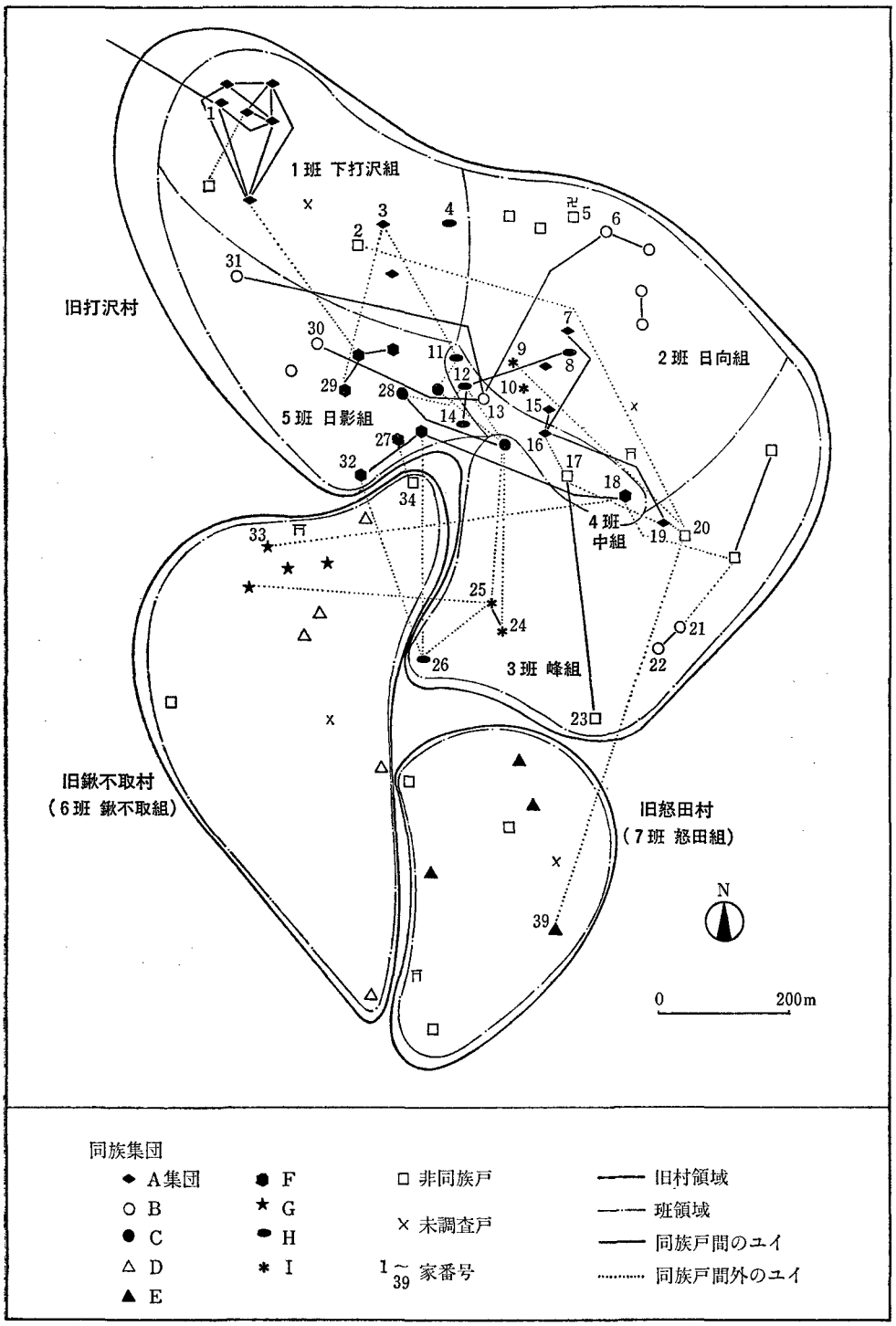

図3　打沢のユイ関係（昭和30年代）

注）№11，12の家については移転前の位置を示してある。

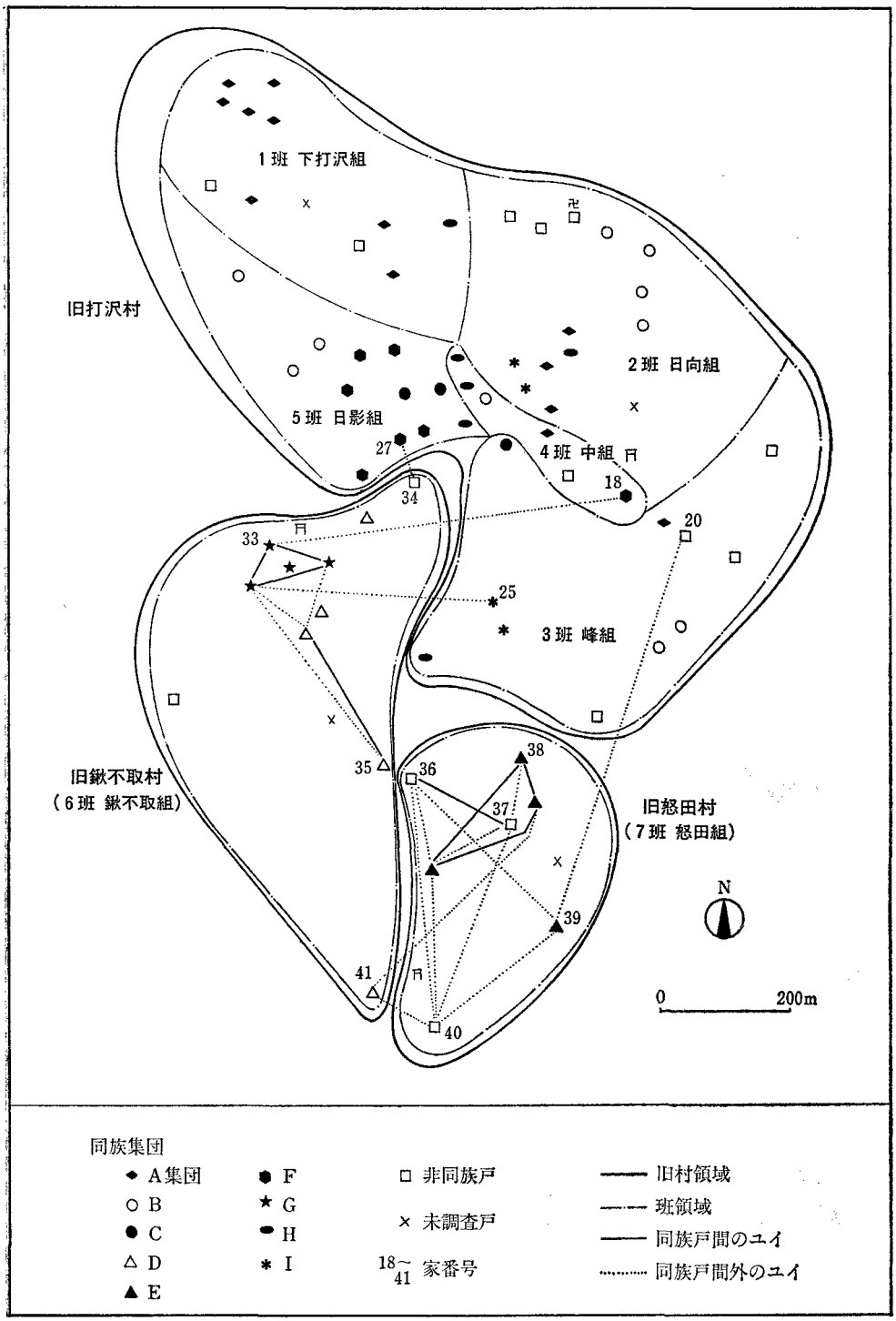

図4　鍬不取・怒田のユイ関係（昭和30年代）

Ⅲ. ユイ関係の検討

本論にはいる前に，対象地区におけるユイの作業内容について簡単に述べておきたい。本研究で取り上げた下伊那郡泰阜村三耕地地区においては，表1に示した作業が行われていた[29]。これらはいずれも，事例地区の生産活動と深く関わっており，ユイが稲作以外にさまざまな農作業に利用されていたことがわかる[30]。

表1　ユイの作業内容

作物等	作業内容	のべ戸数
稲	田植え	47
	稲刈り	37
	脱穀	42
	籾摺	33
養蚕	オヤトイ	14
	葉摘み	2
コンニャク	植え付け	2
	草取り	2
	掘り取り	5
山林	伐採	1
麦	刈り取り	1
柿	皮むき	1

（聞き取り調査により作成）

(1)　同族集団との対応

次に，ユイ関係の契機として同族関係との対応を考える[31]。このような視点を設定したのは，赤田[32]，千葉[33]，博松[34]らによって同族集団内の労力交換が指摘されているからである。

三耕地地区の同族集団について概説しておくと，当地区は「イット」[35]と呼ばれる9つの同族集団と，同族関係をもたない15戸から構成されている[36]。三耕地地区においては，同族集団は特別の機能を有しておらず，F集団及びI集団において，年1回同族祭祀が行われる程度である。図3及び図4から，同族戸，非同族戸の位置関係が複雑であることがわかるが，巨視的にみて以下の特徴を指摘できる。一つは旧村領域内に同族集団がまとまっていることであり，旧村領域を越えて立地しているものはみられないことである。また，G，FやA集団の一部のように，同族戸によっては立地が大変近接しており，これは打沢において顕著である。さらに，同じく打沢においては，非同族戸が集落の外縁に立地する傾向もある。こうした位置関係もユイの関係に少なからず影響を与えていると考えられる。

調査の結果，全体のユイ関係のうち，半数近くの44.9%が同族戸同士のユイで占められていることが明らかとなった。もし仮に同族関係がユイに影響しないと仮定した場合，理論的には7.7%の確率でしか同族関係のユイは出現しないはずであるから[37]，同族関係がユイ結合の一つの契機になっていることが理解されよう。もっとも，上述したように同族戸が互いに近接していることが，同族戸間のユイを多くする一因となっていることは考えられ，実際，比較的近隣に位置する同族戸とのユイが目立つ。しかしながらその一方で，例えば，№13—6，13—30，13—31，17—23のように遠距離のものもみられ，同族関係がユイの契機になっていることを示している。

同族戸間のユイの具体例として，№16を中心とした関係を示そう。この関係は本分家関係によるユイであるが，その労働形態は分家からの一方向的な労働供与ではなく，本家から分家への労働提供もあり，そこではユイの関係が成立していた。具体的には，№16—7，16—15，16—19という形で展開され，田植をはじめ，稲刈り，脱穀，籾摺，養蚕のオヤトイが行われた[38]。ユイに出かける日数は年間3～4日で，作業を依頼した家では作業終了後，食事，酒などを提供したという。

しかし，多くの同族戸間で個別的にせよユイの関係が成立している一方で，H集団及びI集団では同族戸間のユイは極めて少ない[39]。具体的には，H集団においては№12—8，12—14，I集団においては

№24—25のみである。№24—25の関係は，「タテインキョ」と呼ばれる隠居制による分家であること，また，№12はH集団の本家であり，地区内でも比較的大規模な農業を行っていることなどから，ユイの関係をもちやすかったと考えられる。しかし，同じI，H集団の他家でもユイが積極的に行われているものの，同族戸以外の家とのユイが圧倒的である。この理由については明らかではないが，いずれにせよ同族集団がユイの契機になっている場合（A～G集団）と，そうでない場合（I，H集団）とが区別された。

(2) 旧村・班領域との対応

図3及び図4から，ユイ関係がほぼ三耕地地区内で行われていることがわかる[40]。これは，上述した同族関係も含めて，ユイが原則として近隣関係で行われていることを示しているといえる。そこで，次に，地縁的なまとまりとしての旧村及び班領域に注目し，ユイ関係との対応について考察する。ただし，図3・図4との対応上，a．打沢，b．鍬不取・怒田の2つに分けて考察を行う。

a．打沢（1～5班）

図3をみると，ユイ関係が旧村内では比較的まとまっているものの，班領域の枠組みからは大きくはみ出していることがわかる。はじめに旧村領域との対応を考えると，打沢の家々で営まれるユイの90.2%が打沢内部で行われることから，まず第1に打沢内部でのまとまりが指摘される。これは，前述したように同族関係が旧村領域を越えて分布していないことも大きく影響していると考えられる。打沢以外の旧村とのユイ関係では，鍬不取内の家とユイを行う家が若干みられる。一方，怒田との関係は№20—39を除いてみられない。このことから，ユイを通じてみた場合，打沢と怒田の結びつきは，鍬不取に比較して弱いといえる。

次に，班領域との対応をみる。これは複雑に錯綜しているので，表2によって整理してみると，1班及び3班において比較的班内でまとまっていることがわかる。とりわけ，1班については，班内でのユイが11件であるのに対し，班外とのユイは5件と少ない。

ここでとくに注目されるのは，集落の北端に位置する1班中の7戸のユイ関係である。これは，集落の中心から500mほど離れた河谷部及び傾斜面に立地し，村民の間で「下打沢」という小地名で呼ばれる，ある程度まとまりのある場所である。聞き取り調査の結果から，他班の大半の家がユイの相手先を具体的な家で示したのに対し，下打沢では特定した家ではなく，7戸の間で任意に行う家が目立った。また，この7戸のうち6戸はA集団の家々であることから，同族関係の優先した地縁的なまとまりと解釈できる。

また，3班については，隣同士のユイが目立つ。№19—20，21—22，24—25がそれである。この近隣関係によるユイには同族関係によるユイもみられるが，3班の場合，多種の同族が存在することから，1班のような強固なまとまりはみられない。表2及び図3からも，1班においては同族関係でのユイが顕著であるのに対し，3班では同族間のユイが少ないことがわかる。

逆に，班内部でのユイ関係の少ないものとして4班があげられる。4班については，3班同様同族関係が複雑である。また，集落の中心に位置していることから，周囲の他班の家々とユイを結びやすい環境にあること，さらに，4班の班領域が戦中新たに設定されたことなどがその要因として考えられる。

b．鍬不取・怒田（6・7班）

この2つの旧村は，その領域が班領域として重なっているところである。図4及び表2からもわかるように，いずれも旧村（班）内のユイが多い。とくに怒田（7班）において顕著であり，15件中11件が班内のユイである。班外とのユイ関係のうち，鍬不

表2　昭和30年代におけるユイ関係の一覧

旧村名	班	同族集団数	非同族戸数	同族関係によるユイ	同族関係以外のユイ	班内のユイ	班外のユイ
打沢	1	2	2	11	5	11	5
	2	4	3	6	1	2	5
	3	5	4	6	14	8	12
	4	5	1	11	7	3	15
	5	3	0	7	8	5	10
		6**	10**	28**	24**	46*	6*
鍬不取	6	2	2	4	8	7	5
怒田	7	1	3	4	11	12	3

*　旧村領域内外のユイ関係を示す。
**　1班～5班の合計とは一致していない。
（聞き取り調査により作成）

取（6班）との関係は，№40[41]と№41を除いてみられない。

ここで重要なのは，鍬不取と怒田の境に位置する№35及び№36がユイの関係をもたないことである。この2戸は小起伏を境に隣接していながら，互いにユイの関係をもつことはなく，それぞれ鍬不取内，怒田内の各戸とのユイを行ってきた。この事実は，ユイ関係からみた時，鍬不取と怒田が個別の領域として存在していることを示唆するものとして捉えられる。また，怒田については，打沢との関わりが1件を除いてみられないことを前に述べたが，鍬不取との不連続性もみいだされたことによって，怒田の個別性が極めて鮮明に描き出されたといえよう。

一方，鍬不取については怒田との結びつきは弱いのに対して，打沢とのユイ関係は12件中3件と怒田に比べてやや多い。№27―34が道路をはさんで隣接しているのを除けば，前項でふれたように遠隔間の関係もみられる。鍬不取の場合，家屋の分布が打沢寄りであることも影響していると考えられる。しかし，これらに比較して領域内での関係も多いことから，ユイ関係からみた鍬不取のまとまりを認識することができよう。

また，鍬不取，怒田の領域性をより明確にしているものとして，三耕地以外の家とのユイ関係がみられないことも付記されねばならないだろう。三耕地地区のユイ関係を全体としてみたとき，ほぼ地区内でユイ関係がまとまっていたが，打沢においては1班の№1が隣接地区の1戸とユイを行っていた。鍬不取及び怒田の場合，とくに怒田においては隣接地区の家との距離は，最も近いもので300mほどであり，これまでみてきた三耕地地区内での例と比較しても，決して遠隔にあるとはいえない。にもかかわらず，それらの家との関係がみられないことは，鍬不取，怒田のそれぞれのまとまりを改めて示すものとして捉えられる。

Ⅳ．むすびにかえて

村落社会の空間構造をみる指標として，労力交換のユイを取り上げ，ユイが積極的に行われていた昭和30年代の状況をもとに，ユイ関係とムラの空間的な枠組みとの対応を検討した。

その結果，事例地区である泰阜村三耕地地区の場合，ユイ結合の契機として，まず同族関係が影響していることが明らかとなった。ただし同族集団によっては，若干の例外もみられた。村落社会の空間構造との関連においては，地区全体のまとまりとともに，旧村領域の存在が浮かび上がった。とくに，旧打沢村及び旧怒田村において，ユイ関係が旧村領域内で比較的まとまる傾向がみられた。ただし，班領域との対応においては，旧鍬不取村及び旧怒田村を除いて，とくにまとまりはみられない。第Ⅱ章で述べたように，三耕地地区には神社，堂，寺院の宗教組織に旧村領域ごとのまとまりが存在する。ユイ関係からみた三耕地地区の空間構造は，このような旧村領域の残存を裏付ける形となった。このことは同時に，ユイ関係を検討することが村落社会の空間構造を把握する手段として有効であることを示しえたと考える。

以上，昭和30年代のユイ関係をもとに論を展開し

てきたが，最後に現在のユイ関係及び農用機械の共同使用について付け加えておきたい。

三耕地地区のユイ関係は，後述する農用機械の普及及び農業そのものの衰退を直接的な要因として，大きく減少した。その内訳は，現在同族戸間のユイが9件，それ以外が8件であり，依然同族戸間のユイが約半数を占めている。このことは，同族関係がユイ関係の契機となっていることを改めて示しているとともに，同族関係にあることがユイ関係の解体を抑制しているということはなく，つまり同族関係の有無がユイ関係の消滅には影響していないことも意味しよう[42]。他方，旧村領域内のまとまりについては，昭和30年代と比較してユイの減少した現在において，むしろ明瞭に現れる結果となっている。

次に，農用機械の共同使用について述べると，三耕地地区においては，一戸当たりの経営耕地面積の狭小さから，これまで田植機をはじめとする農用機械の多くを共同使用に依存してきた。共同使用グループは2～10戸で構成され，6戸前後のものが多い。グループの構成員は，機械普及開始当初原則として班を単位に組織されたが，その後，機械の個人所有，経営作物の転換，脱農などにより構成員の再編成が

表3　「三耕地野菜生産組合」内のユイ関係

農家番号	所属班	ユイ関係の有無		ユイの相手
		昭和30年代	現　在	
No. 7	2	○	○	No. 16
16	4	○	○	7
20	3	×	×	—
26	3	○	×	32
32	5	○	×	26
37	7	×	×	—

（聞き取り調査により作成）

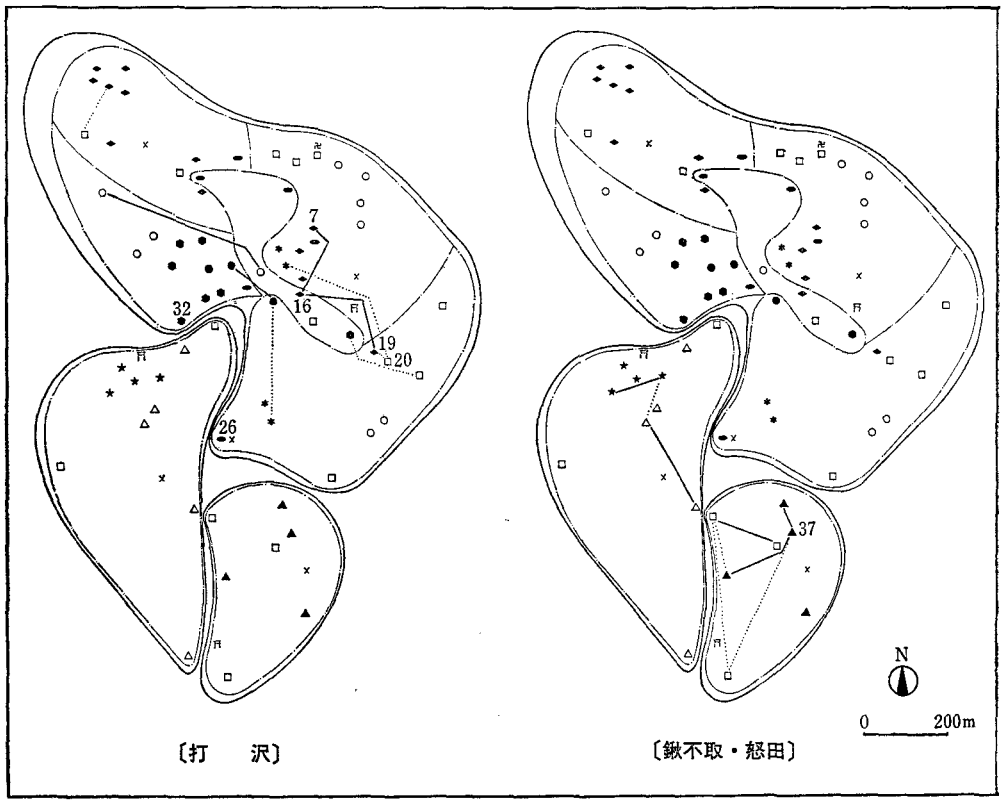

図5　現在のユイ関係
凡例は図3，4を参照のこと。

なされたという。実際，今日において1つのグループが同一班の構成員からなることは少ない[43),44)]。

この集団とユイの関係について，「三耕地野菜生産組合」を例に見てみたい（表3）。このグループは，米をはじめ，トマト・ピーマン・コンニャクなどの野菜生産を中心とした農家6戸が昭和63年に新たに組織したもので，大型トラクター1台を共同使用している。この6戸のうち，個別的ではあるが4戸がユイの関係をもった家である。つまりこの場合，ユイの関係と機械の共同使用グループが，ある程度の整合性をもっていることが指摘される。このことは，伝統的なユイの慣行が少数化した今日においても，ユイ関係が形を変えて残存している事例として捉えられ，興味深い。

（駒沢大学・院）

〔注〕

1）これらを包括的に述べたものに次のものがある。a．浜谷正人（1988）：『日本村落の社会地理』古今書院，122頁。b．野崎清孝（1988）：『村落社会の地域構造』海青社，15～54頁。

2）管見の限りでは，数少ない例として次のものがある。山口弥一郎（1976）：『集落の機能と構成』文化書房博文社，167頁。

3）直江広治（1972）：ゆい（結）（大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂），768頁。

4）小笹芳友(1972)：きょうどうろうどう（共同労働）（大塚民俗学会編『日本民俗事典』弘文堂），202頁。

5）1970年の農業センサスの調査項目である「ゆい・手間替え農家数」においても，この両者が混用されていると思われる。農業集落研究会編(1977)：『日本の農業集落』農林統計協会，105～108頁参照。

6）竹内は，ユイの組織として複数の家が集団を形成し，共同労働という形で各家の作業を行うものと，集団としてではなく個々の関係を結ぶことによって労力を補完するものの2つに分類しているが，事例地区で行われているのは後者のタイプである。竹内利美（1990）：『竹内利美著作集1 村落社会と共同慣行』名著出版，312頁。

7）小泉幸一(1935)：農村労働組織の一様式としての「ユイ」の慣行(二)，帝国農会報，25—9, 58～78頁。

8）大槻正芳(1957)：組・講・結より見たる部落の社会構造，農業経済研究，29—1，38～52頁。

9）前掲2），164頁。

10）前掲7），67頁。

11）前掲3），768頁。

12）島によっては，製糖工場へのサトウキビの供給体制によって，ユイの組織が再編成あるいは消滅したという。平岡昭利(1980)：サンゴ礁地域における甘藷農業の展開と「ユイ」，地理，25—8，57～66頁。

13）甲斐国（現山梨県）などでみられた小地域集団を意味する呼称ではなく，明治行政村を構成する旧藩政村を「耕地」と称した。向山雅重(1975)：『日本の民俗・長野』第一法規，117頁。

14）地形的に窪んだ場所を指すだけでなく，例えば「井戸入洞」といった屋号にも用いられる。

15）国勢調査及び農業集落カードによる。本稿では，未調査の5戸を除く71戸を研究対象とする。

16）農家率は昭和35年に95.2%，昭和60年には91.8%となっている。前掲15）による。

17）農業集落カードによると，経営耕地面積0.3ha未満層の増加が目立つ。

18）農業集落研究会編(1977)：『日本の農業集落』農林統計協会，3～4頁。

19）前掲 1-a），54頁。

20）三耕地共有山入会林野整備組合編（1978）：『三耕地共有山小史—発生から入会林の完結まで—』5～6頁。

21）前掲20），8～11頁。

22）秋葉講，庚申講は戦前までに解散している。

23）農業用水は，主として湧水に依存している。

24）旧3ヵ村統合後の明治期に，青年団が祭事の統一を提案したが受け入れられなかった。泰阜村教育委員会編(1988)：『故老は語る』，43頁。現在では，旧村単位の祭事が年2回行われる他に，三耕地単位の祭も年1回催されている。

25）打沢の草分けのひとつとされる。

26）戦後に「班」と呼ばれるようになったが，現在においても，それまでの呼称である「組合」という表現が多用される。また，「○○組」のような固有の名称もあった（図３参照）。

27）聞き取りによれば，過去に旧村の枠を越えた班領域の再編成が計画されたが，実現しなかったという。ただし，旧打沢村の班（組）の領域は戦中までに何度か変わった形跡がある。

28）昭和30年代から現在までの間に転出もしくは途絶した約10戸の家については未調査であるが，全体に占める割合は小さいことから，支障はないと考える。

29）これらの作業内容には時期的なずれがあり，必ずしも昭和30年代の同時期に行われたものではない。図２参照のこと。

30）養蚕の「オヤトイ」の作業については若干の注意が必要である。オヤトイは上蔟の作業を指し，その際，各戸一斉に手間が必要となるため，養蚕農家間で労力を調達することは困難であった。賃金を支払って人を雇う家以外では，養蚕農家と非養蚕農家とのユイがみられたという。つまり，養蚕農家についてはユイの相手先が限定されることもあったことから，ユイの空間形態に少なからず影響を与えたと考えられるが，この場合の具体的な家関係は明らかでない。前掲の小泉論文では，むしろ経営作物及び作業を同じくするもの同士がユイを結ぶ例もあるとしている。前掲７）。

31）聞き取りによれば，同族関係以外の契機として，恩によるユイが２例みられた。№２—20，３—29の関係は，それぞれ№２，３の現世帯主の婚姻の際，№20，29が仲人をしたことをきっかけにしてユイが行われた。

32）赤田光男(1984)：同族とムラ組の特質（坪井洋文他編『日本民俗文化大系８ 村と村人＝共同体の生活と儀礼＝』小学館），83～138頁。

33）千葉徳爾（1966)：『民俗と地域形成』風間書房，139頁。

34）榑松静江(1957)：灌漑と東亜の農村（喜多村俊夫他編『村落社会地理』大明堂），146頁。

35）「○○イット」という形で表現される。

36）ここでは，同族関係を有する家が２戸以下の場合，同族関係をもたない家として扱う。また，同族集団に属する家を「同族戸」，属さない家を「非同族戸」と表現することにする。

37）$\dfrac{{}_{13}C_2+{}_{10}C_2+{}_{7}C_2+{}_{6}C_2+{}_{5}C_2+3({}_{4}C_2)+{}_{3}C_2}{{}_{71}C_2}$

×100 により算出。

38）№16—7，16—19のユイは現在でも継続されている（図５）。

39）Ｉ集団では№10，Ｈ集団では№４が早い時期から非農家である。

40）№１は１班内の他家とユイを人う一方，隣接する他地区の１戸とユイ関係にあった。

41）№41は鍬不取の領域に立地しているものの，極端に奥まった位置にあり，鍬不取内の家とユイを行うのは困難であると考えられることから，ここでは鍬不取の他の家と同列に扱えないと考える。

42）同族関係が影響をもたないことの理由には，同族関係が希薄になっていることも挙げられよう。

43）最近では土日農業化が進み，機械の個人有化も増加している。なお荒木は農用機械の共同利用形態が，部落単位→「より小さな単位」→個人有化と変化していることを指摘している。荒木一覗（1988)：「農業集落」の構造とその空間的展開，地理科学，43—2，81～92頁。

44）農用機械の個人有化を指向するのではなく，班を基礎とした農作業の協業化により，今日新たに機械の共同利用を行う事例も紹介されている。宮口侗廸(1991)：家族の生産的機能への地域対応，地域開発，1991-4，20～31頁。

〔付記〕

現地調査に際し，三耕地地区の皆さんをはじめ泰阜村役場・泰阜村農協の方々には大変お世話になりました。厚くお礼申し上げます。

なお，本稿は，平成２年度駒沢大学文学部卒業論文に加筆修正したものである。